

研究論文

語彙学習先行モジュールの日中バイリンガル児童・生徒への 応用—母語の漢字知識を活かす

Application of the Antecedent Module of Vocabulary Learning to Japanese-Chinese Bilingual Children: Taking Advantage of L1 Chinese Kanji Knowledge

松下達彦 (桜美林大学)

tatsu@obirin.ac.jp

要約

日中バイリンガル児童・生徒は、L1 中国語の漢字知識を日本語漢字語の学習に活かせば、より早く日本語での教科学習に適応できるはずである。そのための方策として、本稿では松下(2002)の「語彙学習先行モジュール」の考え方を年少者に適用することを試みた。具体的には工藤(1999)の「基本語A」1755語と成人対象の「基本語二千」(2030語)の両者に共通の1558語を基礎資料とし、そこに含まれる基本義と基本的用法が日中両語で一致する同形漢字語150語(9.6%)を「児童生徒の基本語彙のうちのL1中国語知識直接利用可能語彙」として示した。

1. はじめに

よく知られているように、中国語が第一言語(L1)で日本語が第二言語(L2)の場合、中国語L1の知識は漢字語彙習得の面で転移する(大河内(1992)など)。そして漢字語彙面での転移は、年少者にとって特にCALP(cognitive/academic language proficiency 認知/学習言語能力)の発達に直接的な影響を及ぼすと考えられる。

また、中国語知識は音韻を媒介とせずに文字表記のみで転移し、しかもそれが音韻面にまで影響するという現象がある。すなわち漢字の書字形態と意味を媒介に、一度も耳にしたことのない語を日本語に存在する語として使用することがある(松下2002)。漢字知識を有する学習者は意図の有無に関わらず、漢字を目にすれば脳内で意味の処理を行ない、日中バイリンガルの場合、両言語の発達の程度によって処理過程の異なることが推測されるが(玉岡・松下1999、茅本2000)、少なくとも成人の場合、両言語が完全に独立して処理されることはなく、相互に影響がある(Tamaokaほか2004)。日中両語の表記上の同形語(以下「同形語」)の多さや、単漢字の意味から漢字熟語の意味を類推できるケースまで考えると、漢字知識をもつ日中バイリンガルが、日本語漢字を自然

に目にする習得環境からどのような影響を受けるのかを検討することは、日中バイリンガルの言語発達を考える上で極めて重要であると思われる。

例えば、中国語を主要な教授言語とする小中高校から日本語を主要な教授言語とする小中高校に入ってきた児童・生徒の場合を考えてみると、まったく日本語を知らなくても、科目名のうち「算数」「社会」「体育」「道徳」「地理」「保健」「物理」「化学」「生物」はそのまま見ればわかるし、「英語」「政治経済」は日中両語の漢字の字体の相違が微細なのでそれと想像がつく。「歴史」「音楽」「美術」は「歴」「楽」「術」がそれぞれ〈历〉〈乐〉〈术〉であることを知っていれば問題ない。「国語」「生活」「理科」「図画工作」「技術」「家庭」「地学」なども、中国語の意味内容や字体と日本語の科目名のそれが明確に対応するとは言えないが、科目の内容についてある程度の類推はできるはずである。教室の壁に貼ってある時間割表を見るとき、中国語L1の児童・生徒は脳内でどのような処理を行ない、それがその後の両言語の発達にどのような影響を及ぼすのだろうか。どうすればL1中国語の知識を保持しながら同時にL2日本語の発達に有効に活かすことができるのだろうか。

本稿は、L1中国語の漢字知識を直接にL2日本語の習得に活かす一つの方策として、松下(2002)の「語彙学習先行モジュール」の考え方を年少者に適用することを試み、モジュールに含むことができる語彙の一端を示すことを目的とする。

ただし、本稿で論じることには以下のような限界がある。

- ・中国語知識のある年少者に限定される。(漢語圏の年少者(中国語からの借用語を大量に有する言語、すなわち朝鮮・韓国語、ベトナム語などをL1とする年少者)には、一部、考え方を適用できる部分もある。)
- ・成人対象に考えたことの児童・生徒への応用であるため、認知能力、メタ認知能力、一般的知識などが発達途上にある年少者に固有の側面には注意しなければならない。
- ・一義的には言語面の漢字語彙面での発達に限った話であり、性格、社会的環境、動機付け、ビリーフ、学習ストラテジー、認知スタイルなど年少者により大きな影響のある要素に比べれば、影響は限定的である。
- ・漢字語彙の中でも、漢語(=字音語、音読みの語)の一部に限られた話であり、和語(訓読みの語)には一義的には当てはまらない話である。
- ・L2として日本語を学ぶ前に、ある程度漢字語彙を習得していることが議論の前提で

ある。中国語の小学校である程度の漢字語彙を学習し終える9歳ごろ以後にL2日本語環境に入ることが前提で、それ以前のL1の漢語知識が十分に発達していない段階でのL2環境への移行には適用できない。

- ・そもそも「語彙学習先行モジュール」そのものが、経験・直観と先行研究の成果の組み合わせに基づいて提示された仮説であり、実際に実践によって明確に検証されたことではない。うえ、年少者については、稿者は家庭内や限られた周囲での実践経験しかない。効果の検証は実践を待たねばならない。特に、教科学習、母語保持、アイデンティティ、動機付けへの影響などは実践からのフィードバックによる知見が必要である。

これでは条件が多すぎ、確固たる根拠があるともいえず、しかも困難度の高い年少者ではなく相対的に困難の少ない年少者のための提案ではあるが、以下の理由により議論する価値のあるものとする。

- ・漢字語彙はBICS(basic interpersonal communication skills 日常言語運用能力)よりはCALPにより大きな影響があり、その意味では、自然習得に困難が多くて支援が難しいとされてきた認知面(学習言語)での発達と関係の深いテーマである。
- ・正の転移を促進することが同時に負の転移も促進するという「副作用」は一時的には予想されるが、日中両語の漢字語の意味・用法の共通点と相違点に注意を向けるような学習をうまく促せば両言語の発達に大きく貢献できる可能性がある。
- ・現実に日本には日本語をL2として学ぶ中国語L1の子どもが非常に多く、「宝(L1知識)の持ち腐れ」をなくせばより早く学習に適應できるケースも多いはずである。

2. 成人の中国語母語学習者のための「語彙学習先行モジュール」から、日中バイリンガル年少者のための「語彙学習先行モジュール」を考える

松下(2002)で成人学習者対象に提案されている「語彙学習先行モジュール」は以下の通りである。

「中国語系学習者がそろっている教育環境または自習環境において、日本語の語彙学習を、言語学習を構成する一部分として独立させ(モジュール化)、特に初級後半あたり

から文法学習の進度よりも先行して習得を進めるようにする。特に、中国語系学習者に学習しやすい中上級語彙のうち、幅広い場面で使用できる語彙、および学習者の専門領域の語彙は早い段階で学習するようにする。」（松下(2002)）

例えば、条件文を学ぶときにいわゆる初級語彙だけでは限られた語彙しか使えないが、語彙が増やせれば、より豊かな文脈で学ぶことができる。

中上級語彙を使った条件文の例文 (松下 2002)

* 斜字は日本語能力試験2級以上もしくは『日本語教育のための基本語彙調査』において6000語レベルまたは選定外の中上級語彙。それ以外はすべて（日能試3級以下の）初級語彙である。

* 下線部は初級後半で問題となるような文法項目。

…バ

- (1) 努力すれば、必ず成功する。
- (2) 毎日温泉に入れば、健康になります。
- (3) 資金をうまく運用すれば、利潤率はもっとあがるはずだ。
- (4) 放送時間を延長してくれれば、試合の最後まで見られるのに。

…ナラ

- (5) 留学するなら、〇〇〇大学がいいよ。
- (6) 化粧は好きじゃないけど、するなら、もっとうまくしなくちゃ。
- (7) 離婚するなら財産のこともよく考えてからの方がいいと思います。
- (8) 中国では、握手をするなら右手でしなければならぬと言われます。

当然のことながら、これは成人対象に考えられたものなので、言語も言語外知識も発達の途上にある年少者の場合は、それに合わせた語彙の選択と例文の提示が必要である。また、年少者を対象とする場合は、文法習得の途上もしくは終了後であり、文法学習も構造の積み上げではないことが多い。したがって、文法習得のために語彙を増やすとい

うこともあるかもしれないが、それよりは、教科学習（認知面での発達）に早く適応できるようにするという目的のほうが大きいと思われる。

いずれにせよ、L1に含まれる中国語漢字語彙の知識を有効利用できれば、L2日本語においてもより豊かな文脈を提示できるという点では、成人も年少者も同様であろう。

そこで「語彙学習先行モジュール」を日中バイリンガル年少者のために書き換えると以下のようなだろう。

「バイリンガルを含む中国語系の年少学習者がそろっている教育環境または自習環境において、日本語の語彙学習を、言語学習を構成する一部分として独立させ（モジュール化）、中国語系の年少学習者に学習しやすい語彙（L1知識の利用できる語彙）を、優先的かつ集中的に学習する。特に、幅広い場面で使用できる語彙、および教科学習領域の語彙は早い段階で学習するようにする。」

3. 日中バイリンガル年少者対象の「語彙学習先行モジュール」の主張の根拠

以下、「語彙学習先行モジュール」の主張の根拠について、松下(2002)をもとに、これを年少者に合わせて、書き換えてみる。

- a) 同形語は現代日本語の常用語彙に大きな割合を占め、漢字知識を持つ日中バイリンガルの中国語知識の転移は日本語習得全体や認知能力の発達に影響する。漢字を媒介とした正負両面の転移は作文に加え会話でも発生する。これは非漢字圏の学習者には見られない現象である。
- b) 漢字知識の利用による日本語習得を進めることは、L1中国語の保持に部分的に貢献する可能性がある。
- c) 漢字知識を持つ日中バイリンガルにとって漢字語学習は既存知識を利用する学習なので無意味な暗記ではない。
- d) 語彙が多いほど習得に有効なインターアクションを産み出せる。漢字知識を持つバイリンガルは、母語知識を活かすことにより日常生活や学習により早く適応でき、それが文法習得にも有効なインプットやインターアクションを増やす。
- e) 同じ漢字語でも、日本の学校教育での提出順と中国語圏でのそれは異なる。同形語でも後者の方が早く提出されていることが多いと予測される。L1中国語の日中バイリンガルは日本での学年配当までの語彙とそれ以上のレベルの語彙を早く身に付けるこ

とができれば、それだけ早く教科学習に適応できるものと考えられる。

- f) 日中両語の語彙は理科・社会などの教科学習の語彙において共通性が高く、日常語彙において低いので、漢字知識を持つ日中バイリンガルの優位性が発揮できるのは、文脈の助けが相対的に乏しく認知的負荷が高いとされている教科学習においてである。
- g) 日常言語運用能力(BICS)と認知/学習言語能力(CALP)で共通するのは統語能力や基本語彙の能力であるが、使用場面、語彙、関連知識などでは異なるので、学年が上がるほど文法学習にも論理的な日本語での学習を導入し、並行してBICSの学習に取り組めばよい。情意面(学習意欲=動機付け、効力感)にもよい影響が予測される。

(例1) 自分の店を持つために貯金しています。

(例2) 家庭を維持するために収入が必要です。

(例3) 消費者の合法権益を保護するために消費者協会が成立した。

例えば、例1は「～ために」を学習するために成人学習者用初級後半教科書『みんなの日本語』第42課に掲載されている例文であるが、一見してそれより難しそうに見える例2、例3は、中国で小学校4年生程度まで学校教育を受けた児童ならば理解可能な例文である。なぜなら、例文に使用されている漢字語はいずれも中国の代表的な社会科の教科書『社会』第1冊(人民教育出版社)に登場する語彙と内容だからである。これらの語彙はCALPの学習と文法学習を平行して進める手がかりとなろう。(一部は漢字の字体が異なるが、「権」「護」「協」が〈权〉〈护〉〈协〉であることを除けば微細な差異なので理解に問題はない。)

- h) 表記上の「同形語」のうち、転移の影響が最も大きいのは意味・用法面であり、音韻面や字体の相違は意味面ほど影響はなく、一部のものだけに注意すればよい(玉岡・松下1999)。
- i) 先行研究を総合すると、同形語の習得のしやすさは、基本的な意味・用法が ①一致するもの、②全く異なっているもの、③一部が重なるが一部がずれているもの の順である。語義のプロトタイプと語義の転移の関係を調べた Kellerman(1978)(1979)などによると、L2の多義語の学習においてはL1対応語の語義の典型度の高さと転移の可能性には強い相関があるので、同形語の学習の初期の段階では基本義(プロトタイプの意味)が一致していればその他の微細な語義の相違は無視すればよいといえる。

j) 語義の認知の心理的プロトタイプ度と習得の可能性の関係から考えると、語の意味が日中で共通の場合でも、ともにプロトタイプから遠いと認知されれば習得が難しく、日中で異なる場合、中国語の語義の認知のほうがより典型的なら日本語の習得は困難だが(加藤(投稿中))、日本語のほうが典型的なら日中両語で異なっても習得は難しくないと予測される。対照研究は重要だが、単なる相違点の記述だけでなく、相違点の心理的プロトタイプ度についても考慮し、言語項目を習得しやすさの観点から分類する必要がある。

4. 児童生徒の基本語彙のうちのL1中国語知識直接利用可能語彙について

以下、工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』を参照し、児童生徒のための基本語彙のうち、どのような語彙がL1中国語知識を直接に利用できるのか、一部を例示する。これらの語彙は、字体の差に注意しながら、あとは日本語の読み方を学習すればよい語彙ということになる。同時にL1の中国語音を保持していければよいことは言うまでもない。

なお、同語彙調査は、以下の6種類の語彙調査を参照して作成されている。①②は年少者語彙に特化しない一般語彙の資料で、③～⑥は年少者語彙を扱った資料である。

[]内は収録語数。

- ①国立国語研究所編(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版 [「基本語二千」=2030語]
- ②国立国語研究所日本語教育センター第2研究室編(1992)『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』未公刊 [2000語]
- ③文部省監修(1992)『にはんごをまなぼう』ぎょうせい [約920語]
- ④大久保愛(1971)『幼児のこくご絵じてん』三省堂 [1350語]
- ⑤林 四郎(1991)『はじめての国語じてん』NHK出版 [約2300語]
- ⑥村石昭三(1982)『こどもことばえじてん』角川書店 [約5500語]

ここで示す語は、基本義と基本的用法が日中両語で一致する同形漢字語である。ただし「同形」という場合には字体の差は問題にせず、同字源の対応字体を含める。また、字

音語であることを前提とし、「食物」を「しょくもつ」と読めば採録可能だが、「たべもの」と読む場合は対象外とする。これは漢字語彙習得において音韻習得を切り離すことは現実的でないという考えによる。(茅本(2000)は、同じ漢字でも音読みと訓読みでは、中国語L1の上級学習者でも処理速度が異なることから、一つの漢字に両言語の音韻情報が備わっていて、しかも日本語を処理する際にL1中国語の音韻情報も活性化されていると推論している。)

3種類以上の資料に共通する語彙を工藤(1999)は「基本語A」と呼んでいるが、その「基本語A」1755語と成人対象の「基本語二千」(2030語)(上記①)の両者に共通の1558語(=「成人、児童生徒を問わず、言語生活上必要不可欠な基本語彙」工藤(1999))に含まれるL1中国語知識直接利用可能語彙は、字体の相違を無視すれば150語あり、ほぼ1割(9.6%)に相当する。これだけでは教科学習を直接に左右するほどの量とは考えられないが、それでも基本語の1割の学習において母語知識が有効であれば、他の言語を母語とする場合よりも有利である可能性が高い。しかも、基本語二千以外の語彙に拡大して考えると、L1中国語知識直接利用可能語彙の割合は上昇する。

ただし、「基本語A」にのみあらわれる語198語(児童生徒にとってのみ基本度の高い語彙)に含まれるL1中国語知識直接利用可能語彙は、字体の相違を無視しても、わずかに「秘密」「衝突」の2語しかなく、割合にして1.0%しかない。やはり漢字語彙は相対的に成人語彙に多いといえる。

児童生徒の基本語彙のうちのL1中国語知識直接利用可能語彙 一覧表

A. 3種類の資料に共通する「基本語A」(1755語)に含まれるL1中国語知識直接利用可能語彙(簡体字の場合)

A-1 基本義が共通で、字体も簡体字と変わらない語(64語)

握手、安全、温度、外国、科学、学校、家庭、完成、牛肉、教室、去年、金属、警察、原因、健康、交通、幸福、公平、呼吸、最初、材料、作品、作文、参考、事件、事故、地震、自信、社会、自由、出席、少女、女性、人口、数字、性格、生活、成功、整理、石油、全国、想像、尊敬、大学、体操、男性、同情、当然、努力、内容、燃料、能力、

秘密、表情、平等、文章、方向、命令、目的、文字、有名、理由、流行、利用、

A-2 基本義が共通で、字体が簡体字と微妙に異なる語 (40 語) *カッコ内は簡体字
= (香港・マカオを除く) 中華人民共和国から来た子どもにとって、理解は問題ないが
書くときに注意を要する語

以下(以下)、以外(以外)、以上(以上)、位置(位置)、以内(以内)、印刷(印刷)、
印象(印象)、英語(英語)、海岸(海岸)、感謝(感謝)、簡単(簡単)、期間(期間)、
気候(気候)、規則(規則)、疑問(疑問)、銀行(銀行)、空気(空気)、計算(計算)、
結果(結果)、結婚(結婚)、決心(決心)、広告(広告)、黒板(黒板)、三角(三角)、
散歩(散歩)、四角(四角)、失敗(失敗)、小説(小説)、醤油(醤油)、将来(将来)、
植物(植物)、成績(成績)、責任(責任)、説明(説明)、直接(直接)、突然(突然)、
変化(変化)、問題(問題)、勇気(勇気)、理解(理解)

A-3 基本義が共通で、字体が簡体字と大きく異なる語 (46 語) *カッコ内は簡体字
= (香港・マカオを除く) 中華人民共和国から来た子どもにとって、字体の異なりのため
に理解できない可能性があるが字体の対応さえわかれば理解できる語

違反(违反)、鉛筆(铅笔)、音楽(音乐)、会議(会议)、関係(关系)、漢字(汉字)、
記憶(记忆)、危険(危险)、季節(季节)、基礎(基础)、距離(距离)、記録(记录)、
経験(经验)、化粧(化妆)、欠席(缺席)、公園(公园)、行動(行动)、最後(最后)、
雑誌(杂志)、時間(时间)、時代(时代)、実験(实验)、実現(实现)、手術(手术)、
出発(出发)、種類(种类)、常識(常识)、衝突(冲突)、職業(职业)、親戚(亲戚)、
心臓(心脏)、正確(正确)、選挙(选举)、選手(选手)、戦争(战争)、台風(台风)、
太陽(太阳)、電話(电话)、動物(动物)、特徴(特征)、図書館(图书馆)、農業(农业)、
発明(发明)、範囲(范围)、複雑(复杂)、録音(录音)

**B. 3種類の資料に共通する「基本語A」 (1755 語) に含まれる L1 中国語知識直接利
用可能語彙 (繁体字の場合)**

B-1 基本義が共通で、字体も繁体字と変わらない語 (97 語)

握手、安全、以下、以外、以上、位置、以内、印刷、印象、英語、鉛筆、家庭、感謝、

完成、記憶、期間、基礎、規則、疑問、牛肉、教室、去年、距離、銀行、警察、計算、結果、結婚、決心、原因、健康、公園、行動、幸福、公平、呼吸、最後、最初、材料、作品、作文、三角、四角、時間、事件、事故、地震、自信、時代、失敗、自由、手術、出席、常識、少女、小説、職業、植物、女性、人口、親戚、正確、性格、生活、成功、成績、整理、責任、石油、説明、想像、尊敬、太陽、男性、直接、電話、同情、動物、努力、内容、燃料、農業、能力、秘密、表情、平等、文章、方向、命令、目的、文字、問題、有名、理解、理由、流行、利用、

B-2 基本義が共通で、字体が繁体字と微妙に異なる語 (21 語) *カッコ内は繁体字

＝繁体字圏から来た子どもにとって、理解は問題ないが書くときに注意を要する語
違反(違反)、音楽(音樂)、温度(溫度)、海岸(海岸)、漢字(漢字)、簡単(簡單)、季節(季節)、記録(記録)、交通(交通)、黒板(黑板)、参考(参考)、散歩(散歩)、種類(種類)、衝突(衝突)、醤油(醬油)、心臓(心臟)、選手(選手)、戦争(戦争)、特徴(特徴)、突然(突然)、録音(録音)

B-3 基本義が共通で、字体が繁体字と大きく異なる語 (32 語) *カッコ内は繁体字

＝繁体字圏から来た子どもにとって、字体の異なりのために理解できない可能性があるが字体の対応さえわかれば理解できる語

会議(會議)、外国(外國)、科学(科學)、学校(學校)、関係(關係)、危険(危険)、気候(氣候)、金属(金屬)、空気(空氣)、経験(經驗)、化粧(化粧)、欠席(缺席)、広告(廣告)、雑誌(雑誌)、実験(實驗)、実現(實現)、社会(社會)、出発(出發)、将来(將來)、数字(數字)、選挙(選挙)、全国(全國)、大学(大學)、体操(體操)、台風(臺風)、当然(當然)、図書館(圖書館)、発明(發明)、範囲(範圍)、複雑(複雑)、変化(變化)、勇氣(勇氣)、

5. 今後の課題

理論的にも応用的にも不明な点が少なくないが、いずれにしても本稿で述べたことは仮説の組み合わせによる提案であるので、将来的にはこのモジュールに基づくプログラムを実施して効果を検証する必要がある。そのためには、漢字や語彙の学年配当との関

係、その中国の教科書との対照を行なう必要もあるであろう。

謝辞

本稿は母語・継承語・バイリンガル教育研究会 2004 年度大会 (2004 年 8 月 8 日、お茶の水女子大) において発表した内容に基づいている。また、内容の一部についてニューサウスウェールズ大学院生の加藤稔人氏より有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を表します。

引用文献

人民教育出版社地理社会室編著(2000)九年义务教育六年制小学教科书《社会》(第一册)

人民教育出版社

海外技術者研修協会監修(1999)『みんなの日本語 初級Ⅱ』スリーエーネットワーク

加藤稔人(投稿中)「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、語
転移理論の観点から—」

茅本百合子(2000)「日本語を学習する中国語母語話者の漢字の認知—上級者・超上級
者の心内辞書における音韻情報処理—」『教育心理学研究』48-3, 日本教育心
理学会

Kellerman, E., (1978). Giving learners a break: Native language intuitions as
a source of predictions about transferability. Working Papers on
Bilingualism, 15, 59-92.

Kellerman, E., (1979). Transfer and non-transfer: where we are now. Studies in
Second Language Acquisition, 2, 37-59.

工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房

大河内康憲(1992)「日本語と中国語の同形語」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研
究論文集』(下)くろしお出版

松下達彦(2002)「中国語を母語とする日本語学習者のための語彙学習先行モジュールの
提案—第二言語習得理論、言語認知、対照分析、語彙論の成果を踏まえて—」
中国日语教学研究会(中国日本語教育学会)会誌《日语学习与研究》2002年第
1期

玉岡賀津雄・松下達彦(1999)「中国語系日本語学習者による日本語漢字二字熟語の認知
処理における母語の影響」第4回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「ア
ジア太平洋地域における日本語教育と日本研究:現状と展望」(香港理工大学,
1999年11月20日)発表資料

Tamaoka, K., Miyaoka, Y. & Matsushita, T., (2004). Inter-language Activations
and Inhibitions in Cognitive Word Processing by Bilinguals in the
Chinese and Japanese Languages, 言語科学会(JSLS)第6回大会予稿集